

まうあて まよせい

rcrc.ryukoku.ac.jp

〔発行日〕
2019年9月20日

〔編集・発行〕
龍谷大学 矯正・保護総合センター



矯正・保護総合センター長に就任して

龍谷大学
矯正・保護総合センター長 浜井 浩一

福島センター長の後を受けて、矯正・保護総合センター長を務めることになりました。福島センター長時代には、6年間研究委員長として主に研究プロジェクトの統括やネットワーク講演会・シンポジウムの企画等を担当してきましたが、それ以前には矯正・保護課程委員長も経験しています。また、私は、龍谷大学に着任する前には、法務省に勤務した経験を持ち、少年鑑別所、少年院、少年刑務所、(B指標)刑務所、保護観察所といった矯正・保護現場を経験してきました。その意味で、矯正・保護総合センターに対しては強い思い入れがあります。実務家出身で矯正・保護を主要な研究分野とする初めてのセンター長として、福島センター長の功績を引き継ぎつつ、これまでの経験をいかし、教育や研究、社会連携活動の分野において、一層事業を推進していく所存です。

近時、矯正・保護を取り巻く状況はめまぐるしく変化しています。1995年に発生した地下鉄サリン事件の影響を受けた厳罰化の推進によって、2000年前後、刑務所は過剰収容時代を経験しました。さらに2001年に発生した名古屋刑務所での受刑者死亡事件を受けて2003年に法務省に行刑改革会議が設置され、その後監獄法が改正されるなど日本の行刑は大きな変革の時代を迎えました。こうした状況を背景にPFI刑務所が誕生し、刑務所処遇

は新たな時代を迎えました。政府は、2008年に「犯罪に強い社会の実現のための行動計画2008」を発表し、それまでの監視と制裁による異物排除型の刑事政策から、犯罪者を生み出さない再犯防止型の刑事政策への転換を図りました。2009年には矯正施設を出所しても居場所のない高齢または障がい者を支援するための地域生活定着促進事業が始まりました。2012年、政府は、社会における「居場所」と「出番」をキーワードとして再犯防止に取り組むことを宣言しました。そして、2016年12月には国会で「再犯の防止等の推進に関する法律」が成立、公布・施行され2017年12月には政府の「再犯防止推進計画」が閣議決定され、地方自治体においても再犯防止に向けた取り組みが求められるようになりました。

このような流れの中で、矯正・保護の分野では再犯防止に向けた様々な改革が始まり、地方自治体では再犯防止推進計画や再犯防止条例の策定が始まるなど、矯正・保護や再犯防止に関する専門的知見を有する当センターが果たすべき役割はますます大きくなっています。こうした社会からの期待や要請に応えるためにも、私は、センター長として、皆様方のご支援・ご協力を得ながら、センターが持つ三つの機能である教育・研究・社会貢献を有機的に循環させることで、これまで以上に優秀な人材を養成し、研究を深め、成果を社会に還元するなど活動内容をさらに充実させていきたいと考えています。どうか、よろしく願っています。



センター主催 第8回矯正・保護ネットワーク講演会

2018年12月8日に開催しました第8回矯正・保護ネットワーク講演会では、特定非営利活動法人 食べて語ろう会 理事長である中本忠子氏をお迎えし、「子ども達の居場所」と題して、ご講演をいただきました。当日は、約270名の方にご参加いただき、講演会は盛況のうちに終了することができました。

「子ども達の居場所」

講演者 なかもと ちかこ **中本 忠子 氏** (特定非営利活動法人 食べて語ろう会 理事長)

開催日時／2018年12月8日(土) 13時35分～15時25分

開催場所／龍谷大学 響都ホール 校友会館

●開催趣旨

龍谷大学は、100年以上に及ぶ浄土真宗本願寺派の宗教教誨を基盤としながら、1977年に刑事政策に特化した教育プログラムとして、矯正課程（現在の矯正・保護課程）を設置しました。それ以来、刑務官や法務教官、保護観察官などの専門職のほか、保護司や篤志面接委員、BBSなどのボランティアの養成に努めて参りました。

また、2001年には、矯正・保護についての学術研究を推進する矯正・保護研究センターを設置しました。この研究センターは、2002年度からは、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（AFC）に採択され、8年間にわたり研究活動を行ってきました。

2010年には、矯正・保護総合センターを開設し、矯正・保護課程の教育活動と研究センターの研究活動との有機的な統合をはかることとしました。さらに、矯正・保護の分野における社会貢献活動も、事業の柱として明確に加えることとしました。その一環として、2011年度から矯正・保護ネットワーク講演会を開催させていただいております。この講演会は、矯正・保護の実務家や関係する行政機関、民間団体、企業家、専門職の方、地域の方など、矯正・保護の問題に関心を寄せる多様な人びとに対し、それぞれの思索と相互理解を深めるため、議論・研修の場として提供させていただいています。

今回は、中本忠子氏をお招きし、ご自身の経験・活動に基づき、子ども達の居場所づくりについて、ご講演いただきました。

●プログラム

- 挨拶・趣旨説明
福島 至（龍谷大学矯正・保護総合センター長〈当時〉／同大学法学部教授）
- 講演者紹介
浜井 浩一（龍谷大学法学部教授）
- 講演
講演者 中本 忠子氏（特定非営利活動法人 食べて語ろう会 理事長）
- 質疑応答

●後援

京都府、京都市、浄土真宗本願寺派、NHK京都放送局、京都府保護司会連合会、京都府更生保護女性連盟、更生保護法人京都府更生保護協会、京都BBS連盟

はじめに —活動から気づいたこと（子どもの「空腹」「孤独」の解消が犯罪・非行の予防に繋がる）—

広島から来ました、中本でございます。よろしくお願いたします。今日来てびっくりしたのですが、私が来るようなところではない、場違いなところへ来たような感じを持っております。すみません。それではよろしくお願いたします。

〇講師紹介者 これから、講演者の中本さんについて知っていただくために、ご自身が出演されたテレビ番組を皆様にご覧いただいた後、中本さんのお話を始めさせていただきます。

講演者が出演されたテレビ番組を約25分上映

ありがとうございます。いま、テレビに出ている子どもたちは、現在私たちの活動を支援してくれております。ありがたいと思います。共同募金なんかも、この子どもたちが本当に一生懸命になって、集めてくれている状況です。本当に、私がいままでやったことが非常によかった、報われたというふうに思っております。だから、ボランティアはすごく必要だと感じております。

まず、いまからこの子どもたちに限らず、私たちがいままでやってきたことをお話させていただきます。

私が保護司になったのが昭和55年です。初めは、何をしていたのかが分からないような状態だったのですが、2年目ぐらいからいろんな子どもたちに会い、いろんな犯罪をした人たちと会ううちに、おなかがよくということが一番犯罪の源になるということに気が付きました。

それでご飯を食べさせることにしたのですが、それと同時に、居場所、孤独というようなことが重なって非常に大きな犯罪に結び付くということが、だんだんと分かりだしてきてたんです。

空腹の分はご飯を炊いて、たとえ私がいなくても、家を開放して食べてもらえば、それで空腹は補うことができていたのですが、今度は孤独の分をちゃんと癒やしてやるということになると、孤独はやはり私たちがいなくては、解消できない。

だから、私もいろんなところに、同じように保護司をしている人たちにも頼んだのですが、なかなかいい返事はもらえなくて、「そこまでする必要はない」というような批判がかなりありました。

でも、やはりしなくてははいけない。しなくては犯罪予防にもならないし、この子どもたちが再び罪を犯すということもよく分かっていたので。私もどちらかという、言ったことは後へなかなか引くことができないので、やると言ったらやるというふうに決めて、子どもたちの孤独を解消しました。

私の知っている人たちに頼みまして、「あんた、ちょっと、こういうふうなことをやってみないか」というようなことで、一人、二人、そういう子どもたちと向き合うような活動をしてもらうという方法をとったんです。



講演する中本氏①

子どもの居場所づくりに奮闘 —継続は力なり—

これも一つは功を成してよかったのですが、今度は居場所の問題ということになると、やはりちゃんとしたところが欲しいということになりました。私（の個人）の家に、かなりの数の子どもが集まっていたので、逆に私自身の居場所がなくなるような状態で、家の中がいつもそういう子どもたちの居場所になりました。

そのため、私が家のトイレに行くこともできず、近所のトイレを借りるとか、ショッピングセンターの公衆トイレまで走っていくというような感じになりました。結局、私の居場所がなくなってしまい、これではどうすることもできないということで、今度は近くにある公民館を1カ月に4回、毎週日曜日に借りて、そこでやりました。あとは、もう全部うちでやっていたのですが、うちは市営住宅なんです。市営住宅でやるということになると、やはり隣近所があります。さいわい隣近所からの批判はありませんでしたが、やはり私たちの団体の方から内々の反対（保護司仲間からの反対）はかなりありました。私がそこまですると言ったら、「保護司になる人がおらんよ」とか、いろいろ言われました。そういう面では、私もつらい思いをしてきたのですが、「私が手を離したら、いったいこの子どもたちはどうなる」という感じになり、私も「そういうようなことは一切耳に入れることはすまい」というふうに思いました。反対も批判も聞くのは聞いていたのですが、一向にそういうふうなことは直さずに、自分なりにやってきたというのが現状です。

やはり、お金もかなりかかりました。これを20年ぐらいの間、個人でやっていましたね。子どもたちは食事がすごく進むので、1日に3升から4升コメを炊くということがずいぶんありました。これは個人でやっているときです。いまは皆さんの善意でいろいろなところから支援もいただいてやっておりますから、いまはもう全然心配はありません。

個人でやっていたときは、私も内緒で親の遺産をそれに出したり。私もどちらかといったら、あまり欲がないんです。親の遺産を全部持って死ねるものでもないし、みんなに喜んでもらえばそれでいいかというよう

な感覚で、全部使い果たすというような状況でした。やはり子どもたちがよくなってくればという気持ちでやったのですが、私はそれが報われております。

うちで抱えている子どもたちというのは、親が暴力団に入っている子どもがすごく多いんです。その次に多いのが、親が刑務所に入り、子どもが養護施設に入っていたのですが、親が出所して、養護施設に入っている子どもに帰って来ようと言って引き取ったものの放任状態の子とかがいます。いわゆる依存症的な家庭の子ども、それとネグレクトというような子が、うちは非常に多いんです。うちは再非行防止でうちの活動をやっていますから、小学校の子ども数は少ないです。

そういうふうに行っているだけに、すごくいろんなところからのクレームがきます。もちろん、うちに暴力団の子どもを私が抱えていたので、初めころは暴力団からも嫌がらせを受けておりました。

「中本がうちの子を監禁しとる」と言って、警察の方へ訴えられたというようなこともありました。いまは私もこういう活動を長くしているおかげで、そういうふうなクレーム的なものは一切ありません。

逆に暴力団の親分衆と会っても、「お世話になります」というような言葉が返ってくるという状況で、いまは非常に気持ちよく子どもたちの面倒を見て、生活、ボランティアをしているというのが現状なんです。

だから、20年前、30年前を振り返ったら、「ああいうことがあったね」「こういうことがあったよ」というお話をよくするのですが、やはり継続は力なりで、続けてするということが一番の力になると私は思っております。

76歳の時に私も保護司を定年になりましたが、定年になったときに、こういう活動はもうやめようと思っていたのですが、私自身でやめようと思っても、私が保護司をやめても、子どもたちがずっとずっと来るので、「あんたら、来たら駄目よ」ということを私もよう言わなくて、いまでもそれが続いているというような現状です。

守ってほしいルール – 「うそはつかない」「時間は守る」「あいさつをする」そして「ありがとう」 –

昔に比べたら、いまの子どもたちがどちらかというとやりにくいです。前は頭隠して尻隠さずで、犯罪をしてもすぐに分かる。いまはなかなか知能犯的な子どもが多いので、なかなか分かりづらい。

うちのボランティアのところに、まず「うそはつかない」、「時間は守る」、「地域の人にはあいさつをする」という三つのことだけは、子どもたちみんなに何が何でも守ってほしいということを常々話します。

まず、「うそはつかない」ということで、「うそは、どうしてついたらいけないの」と子どもは聞くのですが、「おまえらがうそをつくことによって、警察に補導されたときに弁解ができないでしょう」と言うんです。

「本当のことを言っておきさえすれば、いくらでも弁解もしてやる。助けることもできる。だけど、うそをつかれていたら言いようがないから、もう助けることはできない。だから、うそだけはつくなよ」ということは常々

言います。

次に「時間は守る」ということは、時間を守ってくれないことには、われわれボランティアも困るんだと。時間はすごく必要だということ、きめ細かく子どもたちには教えてあげるんです。

最後に「地域の人にはあいさつ」と言えば、「地域の人だけにあいさつをすればいいのか」と言いますが、「それは違うよ」と。言葉の弾みで地域の人にはあいさつと言うけど、みんなにあいさつをして、必ずありがとうという言葉だけは言ってくれと。

おまえらが、何でも「ありがとう」と言えば、どんなに腹が立っていても、みんな受け入れる気持ちは持つのだから、とにかく、どんなことがあっても「ありがとう」という言葉だけは言ってほしいと言って聞かせるんです。「分かった」と言って、聞く子もおりますが、聞かない子もおります。

いまの子どもに効く話 – 善悪ではなく、損得で話をする –

このごろの子どもと言ったらおかしいのですが、いまの子どもたちは善悪でものを教えてもなかなか聞いてもらえないんです。私もこういうふうな言い方はいけないのではないかなとも思うのですが、善悪ではなくて損得でものを教えたなら、非常に聞く耳が早いんです。すぐに言うことを聞きます。

まず、うちに低学年の子どもが来たら、箸の持ち方が分からない、茶わんの持ち方が分からないというような子どもがうちに大勢来ます。そうしたなか、「箸の持ち方はこうやって持つんだよ」と言っても聞いてもらえないんです。「分かった」と言っておきながら、すぐに握り箸で食べる。

そうしたときに、こういう食べ方をしたら、うちの近所に「COCO'S」というファミリーレストランがあるのですが、「あそこにおまえらを連れていこうと思っても、連れていけないよ。いい具合に箸を持つようになったら、そこへ連れて行ってあげるから」と言ったら、3日で直るんです。

だから、やはりこれは善悪ではなくて、損得の方がよく効くということが分かって、私はそれからずっと損得でものを教えるのですが、これが良いか悪いかということは、もう少し先になってみないと分かりません。いまはそのように言っております。

いまはありませんが、子どもたちの中には1日に3回ぐらい警察に捕まる子がいました。そういうときに、「おまえが警察に捕まったら、いくらお金がかかるか知っているか」と言ってみたら、「ただだろう」と言うんです。

「ただではない。警察に逮捕されたら、1日に1,200円か、1,300円ぐらいかかって、これは県の税金で支払われている。その次に鑑別所へ

入ったら今度は国の税金で支払われている。少年院に入ったら、これも国の税金で支払われている。」

「おまえらがそういうふうには、しょっちゅう事件を起こしていたら、ぼっちちゃんの年金が上がらなくなるから、上がらないと、おまえらに肉を食わすことができないんだよ」と言ったら、「はあ、はあ」と言って、「警察に捕まらないようにする」と言うのですが、「悪いことをしなければ捕まらないのだから、悪いことはするな」と話しをするんです。

それから3カ月ぐらい経って、その子が、「ぼっちちゃん、3カ月間経ったけど、警察に捕まらなかったよ」と言うので、「偉かった」とは言うのですが、「年金は上がったか」と聞くんです。「3カ月ぐらいでは年金は上がらないので、みんなに言っておいて」と言ったら、「分かった」と返事していました。

「みんなが悪さをしなかったら、ぼっちちゃんの年金が上がって、僕らに肉を食わせてくれる」と言うことが、すごく評判になったんです。これは、良いか悪いかは分からないのですが、私も自分が吐いた言葉だから、「しようがないわ」というふうには思っています。

そうしたら、その子が1年ほど捕まらなかったんです。そのときに、「1年捕まっていないから、だいぶん年金が上がっただろう」と言うので、「上がらないよ。上がったのは1円か2円かな」と答えたら、「1円か2円。そうしたら肉は食えないか」と言うので、「いやいや、食わしてあげる」と言うような感じで、話しています。やはり損得の話の方が私は子どもにはよく効くと思っております。

立ち直れなかった子ども – しかし、いまも警察との約束を守る彼 –

先ほども言いましたように、うちは親が暴力団員の子どもの方が非常に多いです。全部が全部うちに来ている子が立ち直ったかと言えば、これはうそになります。中には正式な暴力団組員になった子もおります。この暴力団組員になった子の場合、私も初めは「ううん」と思ったのですが、この子の家族は、お父さんもお兄さんもみんなが暴力団なんです。その子が「入れ墨を入れたい」とうちに許可をとりきたのですが、「入れ墨なんかを入れることは許可できない」と私が強く言ったら、「でも、今回は2回目の少年院に入るんだ」と言うんです。

「それがどうした」と聞いたら、「これこれ、こういう悪さをしたから、いま、令状が出ているだ」と言うんです。「令状が出た子が、ここに来てもらっても私も困るんだけど」と言ったら、「入れ墨を入れて、警察に自首しようと思って」と言うから、「それはなぜか」と聞いたら、「2回少年院へ入るのに、墨が入っていなかったら馬鹿にされるから、2回目に入るときには墨を入れて入る」と言いました。

「入れてはいけない」と言う、片方は「入れる」と言う。「いちいちこんなことをうちに報告へ来なかったらいいのに」と言ったのですが、

やはり、その子は入れ墨を入れました。入れて、まだナイロンをかぶせた後のときに警察に自首しました。それから間もなく、すぐに少年院に入ったという通知が来ました。だから、この子も2回ほど入ったんです。

今度は少年院から帰ってきたときに、ちょうど20歳になったので、「もう絶対に悪さをしないように」と言ったのですが、少年院から帰ってすぐに暴走行為をしたんです。そのときの罰金が、その子に対して75万円ほど来たんです。

「75万円の罰金で出られたんだよ」と言ったときに、「少年院から出てきて、すぐに75万円のお金なんかないのに、なんでこういう判決にしたんだろうか。このような判決にするんだったら労役の方にする方がいいのに」と私一人がかつか言っていたのですが、本人は「いや、僕が払うから」というようなことを言っていました。

しかし、最終的にはその75万円を払うことができず、警察署の方からも督促が来たりしたので、最終的にこの子は暴力団のお世話になって、75万円をその組で払ってもらって、この子はその組に入ったんです。

入ったときに、この子が私に、「ぼっちちゃん、親分がぼっちちゃんにも話

があるらしい」と言うので、「なんで話があるんだ」と聞いたら、「知らないけど、話があるって」と言うので、「会いたくない」と言ったら、「頼むから、会ってくれ」と言われましたが、「いや、会いたくない」と言ったら、電話がかかってきたんです。

「これこれこうで、こういう子がうちに来ました。話を聞けば、すごくかわいがっているようですが、いまからはうちの方でちゃんとやりますから」というようなあいさつだったのですが、私はそこで妥協はしませんでした。

「この子をお願いします」とも言わず、「なるべくそこからは遠ざかってほしいと思います」ということは言ったのですが、「私に任せてください」という言い方でした。それから、もういまは2年になるのですが、何事もなく2年過ぎていくんです。

警察の人もその子に会えば、「おまえ、ばっちゃんのところへ行っているのか」と聞いて、「行っています」と答えたら、「毎日行けよ。おまえらがばっちゃんのところへ行きさえすれば、私たちは安心していられるんだ」と警察は言うから、その子は「警察との遵守事項を守っているんだよ」と言って、うちに来るのですけど。

一応、組員となっている子がうちに来てくれても、ほかの子どもの手前もあるし、「そここのところをよく考えてくれ」と言ったら、「入れ墨が見えないようにして、フードをかぶって来るから。どうしても1回は来ておかないと、警察の約束が守れないんだ」という言い方をして、1日に1回は必ず顔を出すというような感じで来ます。

やはり、暴力団の中にも、良い人も悪い人もいるんだろうと私は勝手に思うのですが、この子が所属している組の組長は、本人に聞いたら、「自分にはあまり無理を言ってこない」と言っています。

この子は暴走行為をしたので、運転免許が取れないんです。組長の方が免許を取って、組長が運転をして、この子は助手席に乗っているわけです。組長の方が痩せた人なんです。うちの方の子どもは、腹がものすごく出て、体重が100キロ近くあるような子なんです。だから、こっちの方が組長に見えるのですが、それが横に乗って、親分の方が運転する。

なんかこれは変な感じだなと思ったので私が、「おまえ、組長のへり



講演する中本氏②

に乗らずに、後ろに乗りなさい、格好の悪い」と言ったら、「後ろの方が偉い人が乗るから、後ろに乗る方がまだ悪い。僕は助手席なんだよ」と言うので、「そういう車の乗り方があるのか」と言うほど、いまのところ2年になるのですが、新聞に出るような悪さもしていないようです。

私にしたら、この子はすごくうたらだったんです。寝たいときに寝て、食べたいときに食べてというぐうたら生活をしていたのですが、非常にいまは規律正しく生活しているんです。何時に寝て、何時にパトロールをするというふうには。

「やくざがパトロールするというのは、何をパトロールするのか」と聞いたら、「いやいや、よその組員の人が繁華街に来ているか来ていないかということパトロールするんだよ」と言うので、「ええ、そんなこと分かるのか」と聞くと、「やはり、よその人は分かるよ」という言い方をしていました。

組に入っているということ自体がいけないことなのですが、入っていること自体が犯罪だと言う人もいらっしゃいます。これは私もどうかと思っただけなのですが、うちに来る子の中で、この子一人がそういう状況で、組の方に入っております。あとの子どもたちは、みんなそれぞれちゃんとした生活をするようになった子もいるし、いま、その途中の子もおります。

暴力団家族に生まれた子どもの生い立ちと立ち直り

—今、専門学校へ。しかし、切っても切れない親子の縁—

親や親戚、おじいちゃんとかが全員やくざの家族の子どもが小学校4年生のときに、子どもが通っている小学校の校長が私に「頼むから、この子をどうにかして。力を貸して」と頼んできたんです。

「いったいどういう子ですか、先生」と聞いたら、「お父ちゃんは薬でふ抜けみたいになっていて、いまお母ちゃんが刑務所に入っているから、この子はお父ちゃんのところへ来てるんだけど、どうにもならないんです」と言うので、「じゃあ会ってみよう」ということになり、その子が小学校3年生を終えて、4年生になったところです。その子に会ったら、とにかく初対面から私のことは「くそばあ」と呼ぶ。「なんで、くそばあを言うことを聞かないといけないんだ」と言うような子なんです。私は校長に、「これは難しいね」と言ったら、「難しいでしょう。とにかく、頼むから協力してほしい」と言うことでした。

それで、私もしょっちゅう小学校へ行って、その子に話し掛けようとするのですが、逆に逃げる。そうこうする間に、「中本さん、いま、屋根の上の上がったんだよ」とか言われて。とにかく大変な子どもだったんです。

何かの拍子で、この子が夕方うちに枕を持ってきたんです。「あんた、どうしたん」と聞いたら、「僕、今日からこの子になるわ」と言ってきました。「いやいや、『この子になるわ』とは、どういうことよ」と聞いたら、「家に帰らないから」と言って、結局、一晩うちに泊まったんです。

泊まったときに、とにかく臭いというよりも、髪がネチャネチャ、着る服もベトベトという感じでした。うちもそういう年代の子どもがいらないから、うちに服がないから、すぐにうちの近所の人に言って、一応安いパジャ

マなんかを買ってきてもらい、その日からうちに寝泊まりをするようになったのです。

しかし、この子が一応、私のうちを住所として来るのは来て、まずうちで寝るということがほとんどないわけです。1週間に1回ぐらいはうちで寝るのですが、あとは友達のところへ歩き歩いて寝るという感じでした。

小学校のとき、そういう生活がずっと続き、小学校の先生もしょっちゅう、うちに子どもを迎えにくるという状況でした。学校にも行かず、とにかく友達のところを歩き、組の事務所に行く。

うちに来て風呂へ入るときでも、子どもらしい歌を歌わないんです。「網走番外地」とか「兄弟仁義」とか、そういう歌ばかりをお風呂に入って、歌うわけです。私は格好が悪いから、「頼むから、もうちょっと小さい声で歌ってくれないか」と言ったら、「関係ないわ」みたいな感じで、お風呂の中で大きな声を張り上げて歌うんです。

そういうような状況だったので、これはやはり預かなければよかったと思ったのですが、預かった限りは、やはりいい具合にしていけないと思いましたが、この子が小学校の間、結局お母さんが刑務所から帰るまで、うちにいさせたんです。

お母さんが帰ってきたら、すぐに「私が見ます」ということになったので、今度はお母さんがその子を育てることになりました。生活保護を受けたために、お母さんもすぐにこの子を引き取ったんです。

そうしたら、またまたお母さんがすぐに捕まり、刑務所に入ったわけです。そして、その子はまたお父さんのところへ行くことになりました。お父さんのところへ行けば、今度またうちへ来ることになり、中学生まで



講演会場（響都ホール）の様子

は行ったり来たりという生活をしていました。

ところが、中学生の高学年のときにひったくりをした。組関係のところにおいて、ひったくりをした。強盗何とかかんとかというようなことをして少年院に入りました。

1回目に入ったときには、私もすぐに面会に行ったのですが、「いい具合にして、上手にやって早く帰るわ」という言い方をします。そのように反省も何もありませんというような子だったんです。

その子が少年院から帰ってきたときに、お母さんはまだ刑務所から帰ってきてなくて、その子は親戚のところに帰ったんです。帰住予定地を親戚のところにしました。そうしたときに、お父さんから私のところへ電話があって、「いまから、ちょっと行ってもいいか」と言われるので、「あんた、何時だと思っているんですか」と言ったときが夜の10時半だったんです。「こんな時間にうちに来てもらっても困るし、話があるなら明日にしよう」と言ったんです。「明日はうちで巻きずしを巻くから、うちに取りにきますか」と聞いたら、「そうする」と言ったので、「そうしよう」と言って、3月2日の夜10時半ごろに電話を切ったんです。

明るる日に巻きずしを巻いて待っていても来ないし、何でかなと思いがながら、私も忙しくしていました。巻きずしは作ったままにしていたんですが、3日の夜になっても連絡がないし、4日に私の方からお父さんに電話しても出ないんです。

「おかしいな、こういうお父さんじゃない。話があると言ったら絶対に来るようなお父さんだけど、どうしたんだろうか」と思って、家の方に行ったら鍵がかかっているし、自転車があるんです。自転車があるから遠出はしていない。家の中で過去に薬をやったことがある人だから、ずっと睡眠導入薬とか安定剤を飲む人だったので、これはまた薬の飲み過ぎかなと思って警察に行っただけです。

そうしたら、市営住宅なので、管理事務所の方へ行って鍵を借りて、管理事務所の人と警察と私の三人が家に行き、まず鍵を開けようとしたときに、警察の人が「中本さん、私が行くと後がまた面倒くさいから、あんたが先に行って。あんたは友達やから」と言うので、友達ではないわよという感じで、私が鍵を開けて入ったんです。

入って、「どうしたの、いないんですか」と聞くと、部屋が二つあるのですが、奥の部屋に入ったら、首をつったお父さんがぶら下がっていたわけですね。声が出なくて、警察の人が「やはり薬の飲み過ぎかな」と外で言うのですが、私は声が出ないんです。

私もはうようにして、「ああ」と言ったら、その警察の人も横ばいになって、ぶら下がっているのを見たら、「中本さん、外に出なさい」と言って、すぐに外に出され、その人たちがいろんなところへ電話して、パトカーが来て、ぶら下がっているにもかかわらず救急車で来て。いろいろな騒動がありました。

そうしたら今度は私に、「中本さん、あんた警察に行ってくれ」と言われて、「何をしに行くのか」と聞いたら、「あんたが第一発見者だ」と。「よく言うわ、第一発見者にしたのはあんたがしたんじゃない」と、私も警察の人かなり言ったのですが、「いやいや、あんたが第一発見者だから」と言うことで私は警察に行き、事情などを聞かれました。やくざの組員だけに、非常にややこしい。「この家になぜ来たのか」というようなところから始まって、ちょうど3時間かかりました。

私はそのときに、「紫の薄いテープのようなものをくわえて死んでいたけど、あれは何のテープだったのか」と警察の人に聞いたのです。警察の人が「それは聞いていないよ」と言うんです。「いやいや、私は見たのだから、テープがぶら下がっていたんだから」と言いました。後で聞いたら、それは舌で、この辺まで（首のあたり）出ていたんです。棺の中に入ったときには全部入れ込んで、口が膨らむほどでしたけど。

そういう場面を見て、すぐに子どもがいる中学校に電話をして伝えたら、「その子は、今日学校に来ていないし、どこか友達のところにいてるんだろうか」と言うことで、担任の先生と校長が先に来てくれたということがあったんです。

それから、うちの方にずっと来ることになりました。1回目の少年院を出た後はちょうどお母さんの方の親戚のところにいたときで、ちょっと組員のお使いか何かをして、すぐに2回目の少年院に入りました。

そのときに、今度は初めて入ったときの少年院の態度と違って。鑑別所にいるときに「ばっちゃん、お願いがあるんだけど」と私に言ったんです。「たいがい、おまえの言うことはよく聞いているつもりだけど、何だ」と聞いたら、「俺はそういう親戚から縁を切りたいんだ。なんで俺はこういう家に生まれたのか」と言って、鑑別のときにすぐ泣くんです。

「なんで生まれたんだと言っても、生まれてきたものはどうすることもできないけれど、生き方は変えることができるよ」と言ったら、「どうやったら変えられるのか」と聞いてきたので、鑑別の中で面会のときにかなりいろいろな話をして、調査官の方にもお願いしたのですが、やはり家庭環境が環境だけに、もう1回少年院で勉強してもらいましょうということで、2回目の少年院に行きました。

少年院に行ったときに、鑑別でこの子が自分を变えたいという気持ちになってきているんだから、ここで私がぎゅっぎゅと押した方がいいだろうと思って、少年院にしょっちゅう面会に行き、今後のことを話し合いました。

そうしたら、「親との縁も切ってもいいというふうには僕は思う。そのためには、どうしてもばっちゃんの力を借りたい」と言って泣きながら話をする。私もそういうことを聞いて、「ああ、そうか。おまえがそういう気持ちになったら、ばっちゃんもこの年で少々無理とは思いますが、元気な間はやってみようかな」という思いで、一応私がお子を引き取るというような格好にしました。

帰ったときに私の家にこの子を入れると、名古屋の方へお世話になった子が一人いるのですが、次にその子がうちの方に来たいとなったら困る。だからこちらの子も私が預かるとなると、後々無理が来るなと思いましたので、保護観察官などに頼んで、まずこの子のアパートを借りて一人で生活をさせるという方法を取ったんです。

そのときに、この子の場合、周囲は全部やくざというふうになっていまずから、非常に難しい面があったのですが、私も言いましたら強引なもので、「絶対私が責任は取ります」という感じでお願ひしました。

最終的にこの子はアパートを借りて、そこへ住まわせて、高校卒業程度認定試験も受けさせて、それを全部クリアして。「次の段階はどうするか」と言ったときに、「大学に行きたい」と言うので、「おまえが大学に行くとなったら、ばっちゃんの年も考えてくれ」と言いました。

「じゃあ、どうする」と言うので、「専門学校なら2年だから、2年ぐらいたったらどうかなから」という感じで答えました。「それからまたおまえが大学に進学したいというなら、おまえの力で行けばいいことだ」と言って、一応専門学校へ行くことになりました。私もいろんな人に頼んで、いろんな人から知恵を借りて、学資の支援を受けて、いま専門学校にその子は行ってあります。これは非常に私としたりうれしいことです。

だけど、なんか変な感じになってきたのが、いま、刑務所にいる受刑者と家族が電話で話ができるような仕組みになっているんです。うちにいる子どもが、「お母さんからいついつ電話があるから、ばっちゃんどうしようか」と言うので、「ええ、おまえはその電話が来てうれしいのか」と聞いたら、「うれしくはないけど、会話したらお母さんが喜ぶと思うよ」と言う。私には親との縁を切るとか何とか言いますが、やはり親との縁はそんなに切れるものではないのだなということが分かったんです。

「どうしても、お母さんと電話だけでもつながりたいか」と聞いたら、「つながりたいのではないけど、お母さんも俺と話をするぐらいの楽しみしかないんだろうと思うよ」と言います。これはやはり、なんだかんだ言っても、親が好きなんだということが分かりました。

ええ、こんなことが続いたら、そういうふうにつながると分かったら、学資支援の方が断られたらどうしようという私の気持ちが働くのですけど。「なるべく、せめて専門学校を卒業するまで、お母さんとの電話を断るわけにはいかないか」と言ったら、「うん」という言い方で、いま

終わっているのですが。私としたら非常に心配です。

まだ、あと4年ぐらいはお母さん自身も刑務所にいるのですが、気持ちがそっちの方に傾いてくれても困るという不安が私自身にあるのですが、本人は「大丈夫。ただ会話するだけだから」という言い方ではありますが、私としてはちょっと心配ということがあります。

でも、親子の間だったら、親のことを悪く言っていますが、やはりこういうふうなものかなと考える節も出てきているのです。そういう部分では非常に難しいなという感じはしますね。

広島に帰りたい子ども —彼女とその親の関係に悩む日々—

先ほどの名古屋に行っているという子どもも、その自立援助ホームが面倒を見てくれて非常にいいのですが、そこに長くいることができないわけです。いまはそこを出て、普通のアパートを借りて生活をしておりますが、面倒は見てくれています。

でも、広島に帰りたいという気持ちがずっとあるんです。2、3カ月前は、本人いわく泣く声で、「お願いだから広島へ帰らせて。ばっちゃん、帰らせて」と電話がかかってくる。「何かあったのか」と聞いたら、彼女ができた。

彼女ができたということを私はすごく喜んだんです。どんな彼女かということも聞かずに、彼女ができたなら名古屋で落ち着いてくれるというふうな軽い気持ちで、「ああ、よかった。そうしたら仲良くするんだよ」ぐらいのことしか言っていなかったのですけど。

今度は彼女の親がアルコール中毒で、かなりの借金が彼女のところにきて、借金とりが来る。そうしたら彼女が、その相手の男の方に泣き言を言えば、またこの子が給料の中からそれを払うという感じで。本人としたら、働いても見えず知らずのお母さんの方にお金が行くということが自分としたら耐えられないというような愚痴が入ってきました。

「それだったら、お母さんの方を病院に入れるなどの対応をとった方がいと思うから、それは専門的に相談をしてみなさい」という感じで言いました。「ばっちゃん、どこかに相談してくれないか」と言うので、「うん、してみよう」ということで相談しました。その結果、一応お母さんはそういうふうなことになったようですが、彼女とこの子との縁が切れたかといえば、切れてはおりません。

しかし、お母さんがいないということになったら、また気持ちの上で変わって、広島へ帰りたいと言わないようになるかなと思ったら、またここ1週間ぐらい前から盛んに「広島に帰りたい、帰りたい」と言うので、また何かあるのかなというふうには感じるんです。

だから、いつまでたっても、どの子もこの子も、私から切れるというようなことはありません。それぞれにみんなが成長して、ちょっとぐらいのことは人間誰しも、そういう、いろんなことがあるのだから、それをみんな乗り越えてもらわないといけないと思っているんですけど。「犯罪に手を染めるということがなかったら、それでいいかな」と言うぐらいの気持ちで私はいます。

最後に —子どもにとっての居場所とは、自分をさげ出す場所のこと—

やはり、居場所のない子ばかりが集まると、良い方の話はしておりません。悪い方の話ばかりを居場所のない子同士がするので、犯罪が起きるというようなことがあります。これは私の体験です。

だから、子どもの居場所には必ず正常な大人が一人でも二人でも関わる方が私はいと思っています。いま、私たちが関わっているところでは、犯罪はほとんどと言っていいほど、ありません。

子どもたちが、ただ「居場所がない」と言えば、この子は親がいなとか、留守がちだということで、居場所がないと思いがちなのですが、子どもにとっての居場所といたら、自分をさげ出す場所が一番必要

だと思っています。自分をさげ出す場所がどこかにあれば、大人を交えて正常な人がその中にいさえすれば、犯罪が起きることはないというふうには私は思っています。

だから、うちの方もそれをモットーに、まず空腹、孤独、環境。その中でやはり子どもたちにも言うんです。「謙虚な気持ちだけは持ってほしい。謙虚な気持ちがありさえすれば、自然に『ありがとう』という言葉が出るよ」ということを、かなり私は教えているつもりなんです。これぐらいで、よろしいでしょうか。ありがとうございます。(講演終了)

参加者との質疑応答

(Q：参加者、A：中本氏)

Q 本日はどうもありがとうございました。質問ですが、中本さんが出演された番組をNHKや民放で、ずっと拝見させていただいていますが、そこに出てくる子どもが男の子ばかりです。テレビでしか拝見していないので、たまたまかどうか実態は分かりません。こういう言い方をしているかどうか分からないのですが、男の子と女の子の非行は少タイプが違うとか。女の子の場合は売春とか援助交際とかがあるので、少し非行のタイプが違うし、成人してから過去を振り返っても、女の子の非行はやはり違うのかなという感じを持っています。どういう関り方をしているのか、その辺を差し支えない範囲で教えていただきたいと思えます。

A やり始めた頃は男の子も女の子も一緒にしていたんです。だから、男の子の人数も女の子の人数もほぼ一緒だったんですが。

あるとき、うちにずっと中学校のころから来ていた男の子が彼女を連れてきたんです。彼女を連れてきたときに、彼女の女友達が6、7人おり

ました。その女の子たちを、うちにずっと来ていた男の子が連れてきたんです。

「こいつらもご飯が食べられない」と言うんですが、私もそういうようなことはよく分からないのですが、変なことをしているという感じで、女の子たちを連れてきました。

来たときに、その女の子がものすごくお行儀が悪い。どうしたんだ、この子らのお行儀はというほど、お行儀が悪いんです。そのとき、食事がちょうどカレーだったのですが、とにかくカレーを寝たまままで食べるという感じで。

連れてきた男の子に、「あの中の一人が、あんなの彼女か」と聞いたら、「そうだよ」と答えた。「悪いんだけど、うちの家でエッチするのはちょっとこれは困るよ」と言ったら、「でも、こいつら、飯を食えないんだから」と言う。

うちもこういうふうに関り方になると、ちょっと困るからということで、そ

の子たちをよその全国ネットでやっているところへ頼んだんです。「こういうところへ行ったら」と言ったら、「うん、分かった」と言った。

そこの団体へ行ったら、そこの子たちとけんかになったらいいんです。そうしたら、またその女の子たちがうちに引き返してきて、「あそこは、こうで、こんなだった」という感じで言ったのですが。「ちょっとうちの方もあんたらみたいにお行儀が悪いと困るから、もうちょっとお行儀を直してみるか」と言ったら、「もうそれは直らない。これが普通だ」という言い方でした。

たばこはスパスパふかす。ふかしながら、ご飯を食べる。それも、寝転んで食べるというような状態でした。そのときに、彼氏の方に、「頼むから連れてこないでほしい」と言ったら、「分かった」ということで来なくなったんです。

今度は私もその子たちが少し気になって、「あの子たちはどうしているの」と聞いたら、「あの子たちは自分らでアパートを借りて、生活しているよ」と言うので、「ええ、自分たちでアパートを借りるだけの力があつたの」と聞いたら、「あるんだろう」という言い方です。それならよかったかなと思ったら、それから2カ月ぐらい経ったら、テレビや新聞に出るような殺人がありました。それがこの女の子たちだったんです。

そのときに、あれだけの子どもを、やはり私が断るのではなくて、うちに来させておけばよかったかなとも思ったのですが、私もあれだけの人数はよう受けられないという感じになって。それから、私は女の子の拒否反応がすごくなるんです。

いわゆる女の子の犯罪といえば、自分の体をというような感じで、皆さんは子どもたちのお話をするとします。私はそのものが拒否反応が起きると感じます。だから、あまり女の子は引き受けるといことはしてないのですが、来ないことはないです、いまでも。ほかの女の子です。やはり来ることはありますが、比率としたら、うちは男の子が多いです。そんな感じです。

女の子はどうしても、お金を手取り早く手に入れるコツをよく知っていますね。私らでは到底考えられないような。割と病気を持った子が多いし、うちは食べるということがあるので、私の方が拒否反応が起きて、あまり女の子を快く受けるということはありません。

Q 失礼致します。以前から中本先生のDVDなどを子どもたちと一緒に拝聴させていただいておまして、本当に学ぶところが多くて、今回直接お会いできることを本当に心から楽しみにしておりました。また、本日は素晴らしいご講演をありがとうございました。

私自身、家は奈良なのですが、奈良で生まれたときから本当に反発して。両親と、特に父親と折り合いが悪くて、たくさんの人に迷惑を掛けてきました。本当に迷惑をたくさん掛けるので、家にいらなくなって、四国へ島流しにあった経験があるのですけれども。

高校時代4年間を四国のお寺で拾っていただいて、育てていただいたんです。この間結婚式があって、「拾っていただいてありがとうございました」と言うのと、「拾うなら、もっといいものを拾うわ」と言われるような人間だったのですが。私も本当にコンプレックスといいますか、そういうつらい経験がありまして、いつか子どもたちの居場所、同じような境遇の子どもたちの居場所づくりをしたいという夢があるのですが。中本先生のお話を伺っていたら、保護司を定年するころには辞めようと思っていたとか、最初のころ暴力団の方や、いろんな方から批判を受けていたと。その中でも継続は力なりとおっしゃっていたのですが、続けてこられた原動力といいますか、何か心のモチベーションといいますか、そういうものがあれば教えていただきたいと思うのですが、よろしく願いいたします。

A よく皆さん、そのような質問をなさるのですが、私は相手に添うという気持ちがあつたら、どなたでもできると思うのですが、やはり大人の人なんかは自分に添わそうとする人が多いじゃないですか。これは続きません。だから、こちらの方から相手に添うという気持ちがあつて、人間愛があれば、私はどなたでもできると思っております。

ただ、私は年が年だから、やはり戦前の教育を受けています。私がそういう教育を受けたときは、まず自分を犠牲にして国を愛し、人をも大事にするということがすく頭の中に残っているんです。

だから、大なり小なりそういうことが頭にあるので、私はやはり自分のことよりも相手に対する気持ちの方が、自分の幸せよりこの人が幸せになることが私の幸せというような感覚で、いままでやって来ております。

だから、つらかったということも少々ありました。なかったと言えましょうになりますが、こういう活動をしてきて、もう辞めようというような感じはそんなに持ったことがないです。

私は居留守なんかを使うような人間ではないのですが、最近はずっと居留守を使います。夜の電話は気が付かないふりをして出ないというふうになっています。このごろ、家の電話にしても、どこからの電話だということが分かりますから、その番号を見て、「ああ」という部分で電話に出ないというようなことはあります。これはほとんど警察です。これは出ると迎えが付いてきますので。夜中の迎えといえば、変な話、タクシー代がやはりどれくらいかかる。近場の警察ならいいのですが、遠いところだったら、深夜だったら何千円とかかりますから、そういうときに居留守を使うようになりました。

しかし、私は自分自身で、「ああ私って嫌だな」と感じることもあります。「なぜこんな人間になったのか」と自分で問いかけることがあるのですが、辞めたいと思うのですが、なかなかこれは辞められません。ただ、長く、長く続くと思ったら、やはり子どもたちが成長していく過程（姿）を見ることは、ものすごく楽しいです。ものすごくうれしいです。特にそういう子どもたちの結婚式。今度はその子たちが子どもを生んで、私が名付け親になる。これがまたうれしい。だから、子どもができれば名付け親にしてくれと、絶えず私はみんなに、誰にでも言うのですが、そういうふうなことで長々と続くんだろうと思うんです。

Q 中本先生、どうもありがとうございます。我々は全共闘世代なのですが、その当時流行った言葉で、「強くなければ優しくなれない。優しくなれば強くなれない」という言葉がありまして、もう中本先生にびつたりだと思いました。本当にありがとうございました。

強さの部分なのですが、例えばお話の中で、活動を始められたころにそういうことをしていたら、先生のようにみんなにご飯を食べさせるといようなことをやっているのと、保護司になる人がいなくなるよという保護司の団体からの反対とか。あるいは、これはどうか分かりませんが、市営住宅にお住まいで、自分のおうちを開放しておられたときに、市の方から何かそういうクレームが入らなかったのかとか。市営住宅にお住まいのほかの住民の方々はどうだったのかとか。もう一つ、先生が最後に言われたのですが、子どもたちに自分の居場所を開放したら、今度は自分の居場所がなくなってしまったと言われたんですね。そうすると、先生はお子さまがいらっしゃると思うのですが、家族の皆さまはどういうふうに反応なさったのかという、その辺のところをどのようにクリアしてこられたかということをお伺いしたいと思います。

A まず、私の家族からお話します。私は未亡人になったのが、恥ずかしい話、38歳でなりました。それから三人の子どもを育てたのですが、上と真ん中は私の両親が育ててくれました。下の子はまだ小さかったので私がずっと見ていたんです。そして、両親が育ててくれたということは、両親と一緒にした。皆、それぞれ大学へ行かせてもらったので、私との生活はあまりありません。下の子は、ちょうど私が保護司をしていたときは中学校に行っていて、同じような年代の子がうちに来ていたのですが、うちの子は学校から帰らずに真つすぐ塾へ行く。うちにそういう子どもが来ているということを知っていても、そういうふうなことは話題には一切しませんでした。

中学校を出たら、すぐに高校に入ったのですが、高校のときも朝が早く夜が遅いというような部活に入っていましたから、そういうふうなことで、あまりうちにそういう子が集まってきて、変な思いをしたということはないように感じております。ただ、学校に行ったときに、「おまえのお母さん保護司だろう」とよく言われたらいいのですが、うちの子は保護司という意味が分からなくて、「なんか、よく分からない」というような言い方で、割とマイペースな生活でした。だから、うちにそういう子どもたちが集まってきているということは、あまり愚痴といいますか、そういうふうな話は一切しなかったように私は思うんです。

いまはその子は里親をしております。里親をするときに、私はかなり

反対したんです。里親というのは24時間、18歳になるまでその子を預かるということになるから大変なので、「あなたはお母さんの苦勞を見ていますでしょう」と言ったら、「お母さんの苦勞を見てきているだけに、自分は里親をしないといけないと思っている」というような感じで。いま、仕事をしながら里親として夫婦で一生懸命やっております。だから、私がそういうボランティアをしたおかげで、この子がそういうふうになり親になっても、そういう子どもたちをちゃんとしてやりたいという気持ちになったということは、一つの宝かな、一つの財産かなと思っております。

今度は地域のことで。地域の人たちというのは、そういう子どもたちが来ていても、何か言う人はおりませんでした。やはり、うちの地域が市営住宅ですから、そういうふうにはズボンがだらだらにはいたり、あちこちに唾を吐いて歩いたりということがマンネリ化しているの、そういうふうな子が中本のところへたくさん来て、私らは迷惑よねというような地域の人はおりません。

その代わりに、私たちも言われたら困るし、言われたらこの子たちもかわいそうだということで、私たちが地域のことを先にどんどんとお世話をしているということ、私のグループはみんな地域の役員になったり、そういうお世話をしながら子どもたちのお世話をするので、むしろ私たちのことは褒めてくれることはあっても、悪口や非難ということはありません。私たちも一生懸命なんです。地域では朝早くから掃除に出たり、草取りをしたり。自治会が管理している駐車場がたくさんあるのですが、そういうところを見回りしたり。だから、地域の方からのクレームはありません。むしろ、うちの近所の人たちは、私がいなくて、そういう子どもたちが来たら、「今日、中本のおばちゃんは遅いと思うから、あんたらうちで待っていたら」という感じで、むしろ近所の人たちも協力してくれるというような感じなんです。だから、非常にうちの近所は住みやすいところなんです。ただ、私に批判をするのは、(保護司の)仕事をして内々の人たちが、「私のように、はみ出たようなやり方をすると保護司になる人はいない」とか、そういういろいろな批判というのはありました。

いまでも、反対をしている人はおります。これは仕方がないかなと思うんです。「あんたら、やってみたら」と言ったら、できないから結局、人の批判を言う。できる人だったら何も言わないでしょうと私は思いますから、ああいう人は放っておこうという感じでやっております。だから、人が何を言おうと、私たちはとにかく子どもたちに対して、子どもだけに限らず、少年刑務所から帰ってきたりという子にしても、私たちにしたら子どもですが、とにかく二度とそういうところに行かないようにという願いで、被害者を出さないようにということが私たちの活動のやり方でやっております。批判といったって、内々が言うだけのことであって、あまり気にしないことにしております。いろんなところからたたかれたり批判をされたら、こっちの方もそれだけしたたかになって、強くなりますよという感じなんです。

Q 今日の中本先生の大変素晴らしいご活動とお話をお伺いさせていただきまして、本当にありがとうございました。

先日、テレビを見ておりましたら、学校で朝ご飯を無料で食べさせるという話が出ておりました。その番組の中で、確か海外では、もうすでにそういうことを国が制度としてやっているんだということもお伺いしたかと思うのですけれども。

中本先生みたいないい方が日本のあちこちにいらしたら、こういうことは続くと思うのですが、いらしたらなくなったら、こういうことをどういうふうにするかという制度としてやっていったらいいかということ、何かご示唆いただけたらと思っております。

A 私が最初に保護司になったのが昭和55年で、こういう活動をしたのが昭和57年からです。そのときから思っていたことですが、私はそのころPTAの役員も一生懸命やっておりました。当時、「朝ご飯を食べに行かない子がすごく多動型になって、うろうろして授業にならないんです」という話を聞きましたが、「みんなご飯を食べていないということが原因だろう」と言うことでした。

私はずっと広島で「朝ご飯条例をつくってください」ということを県の教育委員会や市の方、県の方にずっと言ってきました。だけど、皆さん、朝ご飯を食べさせるのは親がすることだからというような感じで、あまり



会場からの質問に答える中本氏

私たちが言うことは聞いてもらえなかったのですが。

1年ぐらい前に広島県知事が私のところに訪ねてこられました。訪ねてきて、「ご飯を食べてこないということがアンケートにはよく載っているのですが、なぜ食べてこれないのかということまでが気が付かなかった」と言って、非常に話が盛り上がったんです。そのとき、ちょうど県知事と、ほかのお付きの方も3、4人一緒になって来られていました。そうしたときに、ちょうど食べられないような子どもも来ていたんです。その子どもたちに、「あなたたちは満足に食事ができていないのか」と聞いたら、結局満足に食事がとれないということを言うだけならいいのですが、親の悪口になったんです。これでは収拾がつかないし、県知事自身も忙しいところを来たので、要点のみを聞くという感じだったのですが、熱心に話を聞いてくださいました。

それから後に、また私は呼ばれて県の方に行きまして、「実情を教えてください」ということだったので、「よそは知らないですが、うちに来る子どもたちの家庭はこれこれこうです」ときめ細かく話をしました。

それから1カ月ぐらい経ったときに、ほかの人が「中本さん、どうもあの話が具体化して、一応そのモデルとして5か所ぐらいの場所でやってみようという話になったよ」と言うので、「ああ、それはよかった」と言いました。話を聞いたら、私が思っていたのと少し違ってました。朝から、すごいごちそうを子どもたちに出すという感じでした。私が言ったのはこういうことではなくて、胃袋そのものを動かすために、朝にバナナの1本でもいいから食べさせてほしいというようなことで、「朝からここまで食べさせてもらっても、お昼に給食があるのだから、こういうやり方は続きませんよ」と言ったら、「いやいや、これは地域の方がしてくれることで、県がすることではない。モデル校になった地域の方がしてくれることになったんです」というような話で、結局いまはそれで落ち着いております。

だから今度は私たちがこの活動を辞めたにしても、広島県はやってくれると私は信じておりますし、よそから聞いても「うちも、やりだしました」というところも出てきているから、広がっていくのではないかと思います。

子ども食堂にしても、かなりいろんなところでやりだしてくれていると聞いていますが、やり方は子ども食堂とうちとは違うのですが。でも、そういうふう子どもたちの居場所があちこちでできるということは、私は非常に喜んでおります。だから、良いことはどんどん続けてやってもらうように、いろんなところで陳情したり、お話をする方がいいと思います。

○司会 ありがとうございました。まだまだ、ご質問は尽きないと思いますが予定した時間となってしまいました。以上をもちまして、質疑応答の時間を終了させていただきます。中本様、今日は貴重なお話をどうもありがとうございました。大変素晴らしいお話でした。会場の皆さま、いま一度、中本様に大きな拍手をお願いいたします。(会場拍手)



第9回 矯正・保護ネットワーク講演会開催案内

主催：龍谷大学矯正・保護総合センター

居場所と出番さえあれば 人は更生できる

～下関駅放火事件を例に考える～

**参加費
無料**

要事前申込

先着300名様

NPO法人抱樸理事長

おく だ とも し

奥田 知志氏



2019年**12月21日(土)**
13:30~15:30 (開場 12:30~)

龍谷大学 **響都ホール** 校友会館

(京都市南区東九条西山王町31 アバンティ9階)

JR京都駅八条東口より徒歩約1分



▶プロフィール

NPO法人抱樸理事長、東八幡キリスト教会牧師。

1963年生まれ。関西学院大学神学部卒業。同大学大学院神学研究科修士課程修了。西南学院大学神学部専攻科卒業。九州大学大学院博士課程後期単位取得。1990年、東八幡キリスト教会牧師として赴任。同時に、学生時代から始めた「ホームレス支援」に北九州でも参加。事務局長等を経て、北九州ホームレス支援機構(現 抱樸)の理事長に就任。これまでに3,400人(2019年2月現在)以上のホームレスの人々の自立を支援。その他、社会福祉法人グリーンコープ副理事長、共生地域創造財団代表理事、国の審議会等の役職も歴任。第19回糸賀一雄記念賞受賞など多数の表彰を受ける。NHKのドキュメンタリー番組「プロフェッショナル仕事の流儀」にも2度取り上げられ、著作も多数と広範囲に活動を広げている。

著書:「もう一人にさせない」(いのちのことば社)、「助けてと言える国へ」(茂木健一郎氏共著・集英社新書)、「生活困窮者への伴走型支援」(明石書店)等

参加お申込み

参加をご希望される方は、事前にお申込みが必要です。

インターネットから

- ①矯正・保護総合センターホームページ(<https://rcrc.ryukoku.ac.jp/>)の「講演会等のお申込み・資料請求」ボタンをクリックしてください。
- ②「お申し込みフォーム」の必要事項(名前・住所・メールアドレスなど)を入力した後、送信ボタンをクリックしてください。
登録されたメールアドレスに受付完了メールを返信いたします。

FAXから

以下の参加申込書に必要事項をご記入の上、送信してください。

お問い合わせ

龍谷大学 矯正・保護総合センター

TEL:075-645-2040 FAX:075-645-2632

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67 至心館1階内

<https://rcrc.ryukoku.ac.jp/>

E-mail: kyosei-hogo@ad.ryukoku.ac.jp

2019年12月21日 第9回矯正・保護ネットワーク講演会参加申込書

フリガナ	当てはまるものに○をしてください。						
お名前	性別	男・女	年齢	10代	20代	30代	40代
				50代	60代	70代以上	
ご住所	〒						
電話番号	FAX番号						
メールアドレス	ご所属・ご職業 (差し支えなければ)						



075-645-2632



刑事立法プロジェクトの研究活動について

近年、罪を犯した人々の「社会復帰」のあり方が注目されつつあります。もちろん、犯罪学や刑事政策といった専門領域においては、長年、「犯罪者の社会復帰」については議論がなされてきました。しかし、近年、犯罪に至るまでの原因や背景がさらに多様化するだけでなく、薬物依存症、クレプトマニア、知的障がいや精神障害による犯罪など、刑罰のみでは十分な対応、そして「社会復帰」の実現が困難な事例の存在が認識されています。このような状況の下では、犯罪に至る原因や背景、「回復」に至るまでのプロセス、そして、個々人の抱える「社会復帰」に必要なニーズも非常に多様化します。従来の画一的なイメージに基づく「社会復帰」（国家や社会の側から見た、「社会復帰」させること）を維持することは困難となります。そもそも、「社会復帰」という言葉さえ古くなっているのかもしれない。

以上のような現状では、罪を犯した人々の刑務所、そして刑務所出所後への対応も変化が求められることとなります。同じような刑務作業、同じような教育プログラム、同じような治療プログラムでは、そして、「社会復帰」を「義務付ける」「強制する」ような対応では、本人の望む社会での生活を実現することは困難なのです。もっとも、刑罰という刑事司法の対応においては「公平性」の確保が非常に重要ですから、この画一的な対応こそ必要です。また、刑罰として社会復帰を目的とすることは、社会復帰を義務付けることにつながります。罪を犯した人の「社会復帰」、本人の望む社会での生活の実現のためには、刑事司

法だけが対応するのではなく、国家や社会、そして市民が連携・協働しながら対応すること、場合によっては刑事司法が極力対応しないことさえ求められているといえるでしょう。現実にも、政策として司法と福祉の連携が進められており、非常に注目されます。

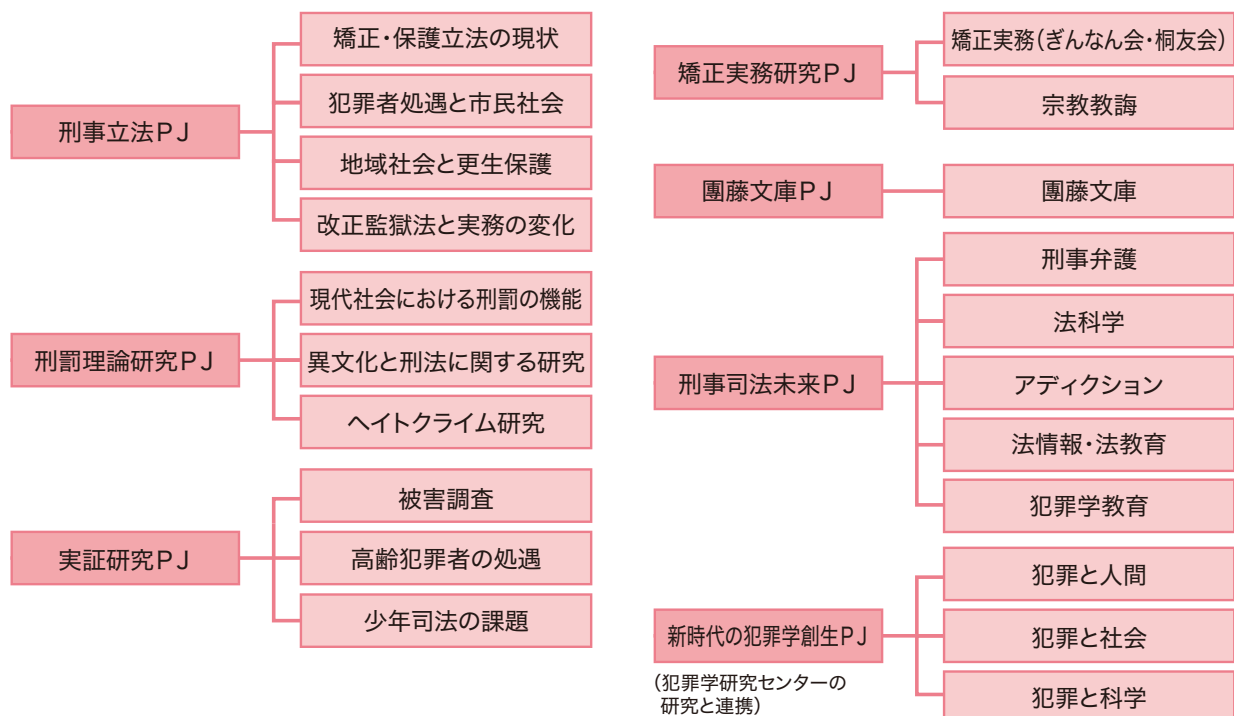
とはいえ、このような考えには多くの批判があり得るでしょう。「悪いこと」をした以上、それ相応の罰と生活を送るべきだ。犯罪をしていない人でも苦しい生活をしているのに、「悪いこと」をした人が得をするのか。「悪いこと」をした人を「真人間」にするの何が悪いのか。「悪いこと」をした人に「本人の望む社会での生活」を望む権利などあるのか。解決すべき問題は山積しています。

刑事立法プロジェクトは、矯正・保護や未決拘禁を対象として、罪を犯した人自身の人間の尊厳、そしてその主体性保障を前提とした対応のあり方を理論的かつ実証的に研究しています。現在、少年法の年齢引き下げとともに、自由刑の内容（懲役刑や禁錮刑の一本化など）が議論されています。このような立法状況のもと、本研究プロジェクトは、上述の問題意識を持ちながら、罪を犯した人自身の視点からの「社会復帰」と刑事司法制度の構築を目指し研究と具体的な立法提案を目指します。

刑事立法プロジェクト代表

斎藤 司（龍谷大学法学部教授）

2019年度 矯正・保護総合センター研究プロジェクト



You,
Unlimited



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY



新刊情報

『龍谷大学矯正・保護 総合センター 研究年報 第8号 2018年』

[編集発行者] 龍谷大学矯正・保護総合センター

[発行所] 株式会社現代人文社

[発行日] 2019年2月28日発行



ISBN978-4-87798-718-3

『矯正講座 第38号 (2018年)』 -「矯正・保護課程」開設40周年記念号(2)-

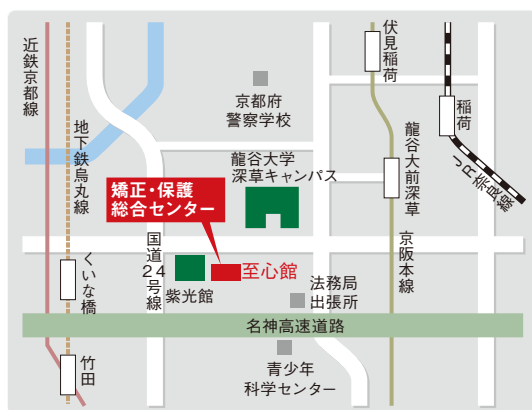
[編集発行者] 龍谷大学矯正・保護課程委員会

[発行所] 株式会社成文堂

[発行日] 2019年3月1日発行



ISBN978-4-7923-3383-6



龍谷大学 矯正・保護総合センター

- 京阪「龍谷大前深草駅」下車徒歩約8分
- JR奈良線「稲荷駅」下車徒歩約13分
- 京都市営地下鉄烏丸線「くいな橋駅」下車徒歩約5分

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67 至心館1階内
Tel.075-645-2040 Fax.075-645-2632

URL <https://rcrc.ryukoku.ac.jp/>

E-mail kyosei-hogo@ad.ryukoku.ac.jp